

神戸角打ち学会望年爛酒会

松浦酒販で「天満の上質時間」を楽しむ

神戸角打ち学会事務局長 伊藤博道（立ち呑み HAKUDOU）

神戸角打ち学会の忘年会は12月の6日、大阪は西天満の名物立ち呑みで、白昼の爛酒を飲む会としてゆるやかに開催された。

総員27名。ゆるり楽しめる人数限定にて。

朝ドラの「ごちそうさん」、大阪天満市場周辺が舞台。このあたりには「上質の大阪」が色濃く残る天満界限。

古くから酒屋を営む名店。天神祭りの前後は店を閉める生粋の大阪商人の店。

「大阪のおばちゃん」「えげつない大阪」と東京に比べ分の悪い大阪。

でも「えげつない」は劇作家の花登筐「どえらい奴」から広まったらしく、実際の大阪は、辛抱して金は節約するが使うときにはぱっと使うおおらかさがあり、「タニマチ」などの言葉もあるくらい。

この「えげつない」を聞いて大阪の地域自体が「えげつない地域」と勘違いされていると生粋の浪花商人はくやしがる。

そして「えげつないのは近江商人と吉備商人」と断じる。（ちなみに花登さんは近江ご出身）角打ちではないが、大阪の居酒屋では安倍野の「明治屋」が有名。でもマスコミに騒がれ、しかも移転。20年ほど前のこの名店には「ゆるやかな浪花の上質時間」が流れていた。

特に昼間の客の少ない時間のぬるめの爛酒で、いかにも酒徒好みの「ぬた」などを肴に、明治屋の屋号の入った形のいい硝子徳利と、薄手の捻り模様の磁器盃ですっと喉に流し込む風情はえもいわれず、客が混んでも、「詰めて」とは決して言わないことを基本にしていた。酒は希少樽酒の爛「松竹海老」。

まさに、この名店居酒屋の立ち呑み版がここ『松浦酒販』。

金盃と染め抜かれた藍染暖簾に品格を湛える。先代主人、金盃と背に染め抜いた法被で、どっしりかまえ店の要。でも最近が高齢のためか店には出ない。

今は天満商人の品のよさを湛えたご夫婦だけの切り盛り。料金表が一切無いのがこの店の真骨頂、「意図的に」敷居を高くしている。

もともと裁判所の近く。客筋はいい。その店で、30円高い、勘定が合わない。を避けるための究極の選択。この方式を選んだ大将の見識や見事。さらに驚くのは伝票なし。客の前にある皿、徳利、瓶、缶を瞬間に見極め、五つ球算盤で電光石火の神業で計算。ちなみに、コの字型のカウンター。満員で34人。この人数を夫婦2人で切り盛り。注文の間違いも、勘定の間違いもこれまで何度行ったかわからないが一度もないし、周りでも一度も無い。

グループの場合その境界までの料金をこれまた瞬間に弾く。但し、焼酎のみごく小さな紙切れを客の前に置き「正」の字で記録。おでん、串カツの数は記憶しているようだ。

看板酒は「金盃」であったが、今は「山麩 福德長」。いつだったかの金盃廃業問題。金盃と命運を共にしてきたこの店、すわ一大事と、奥の倉庫に在庫を山積みにして廃業後

もこの酒を提供し続けた。あろうことか、その後突然金盃は製造復活。その頃は、後釜の看板酒として「福德長」を選んでおり、あえて再取引の道は選ばなかった。

あとで聞けば先代主人が立腹、金盃の経営者一門のいがみあいからの廃業復活劇が許せなかったと。

「飲む日本精神」たる日本酒には「穢れ」は微塵もあってはならないという律儀さか。米の偽装問題などおこせば廃業に追い込まれるごとく日本酒は日本人にとって、「心栄え」の酒なのだろう。

だが、この店の味わい。金盃と染め抜かれた「硝子徳利」と「硝子盃」。なんとも持ちやすく、呑みやすく、心地いい。あの明治屋の「薄手の硝子徳利」と「磁器盃」の立ち呑み版ともいえる見識の酒器である。この盃の大きさが秀逸。大きすぎず、小さすぎず、が絶妙。

立ち呑みでのコップが馴染んだ身にも、程よく酒を湛えるこの盃の大きさは具合がいい。灘酒の雄だけに練りに錬って造り、多くの酒場でこなれ、最高の仕上がりになったのだろう。

中身が福德長になっても、見事に役割を果たしているこの酒器は宝物。灘の酒文化が大阪で生きているのが嬉しい。

この店の肴で特筆すべきは「どて焼き」。大阪の居酒屋、立ち呑みのなかでベスト10に入るだろう。

酒屋の立ち呑みの、串刺しどて焼きでは随一だろう。最近のどて焼きは、関東のモツ煮込みのように串に刺さず、鉢盛りが多いが、蒟蒻での水増し増量が気になる。串刺しでも、安価なアキレス腱部分、噛んでも噛み切れないゴムのようなのに辟易とさせられる。

そんな中での伝統の逸品。この会合での参加者27名。大将に頼んで一人二本分、こさえてもらった。

実は「松浦酒販どてやき」には、深い「味の秘密」が仕込まれている。

それは看板酒に関係がある。どて焼きに、一升瓶に少し残った看板酒を惜しみなく注ぐ。さらに、徳利に残されて勿体無い酒も注ぐ。考えても見よう、どて焼きはいま呑んでいる酒と同じ味で繋がる。これがなんとも言えず、酒からアテへの移行をスムーズにする。

味の違和感が少ないほど心地いいのが酒徒の好み、この根底を押さえているこの店の見識がいい。

あれこれ銘酒をこれみよがしに並べる店には出来ない技。シンプルで気持ちがいい。

「これしか置かない」見識と潔さ。看板酒しか置かない静けさがある。

酒が「金盃」から「福德長」に劇的に変わった。そのあとしばらく時間を置いて、どて焼きの味も「金盃」から「福德長」にゆっくりと変わっているのに気付いた。

わが流儀は、あれこれ店の数をこなすのでなく、好きな店に通う「定点観測主義」。

じっくり腰をすえて店を見つめ続けると、おもわぬものが見えてくる。

これが【立ち呑み】【角打ち】の醍醐味と思うのは私の酔狂か。



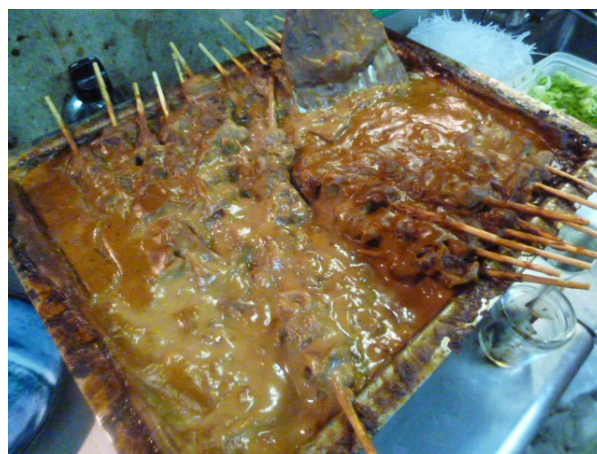
天満の角打ち『松浦酒販』



「硝子徳利」と「硝子盃」



コの字型のカウンター



串刺しどて焼き



見慣れた顔です



HAKUDOU 氏と今岡先生と呑み仲間

ほとんど生きているということ

櫻木 大祐

僕は今年も酒を飲むのだろう。そして酔っ払い、罵詈雑言やため息や小さな嘘や、いろんなモノを吐くのだろう。

本を読み映画を観、音楽を聞き芝居を観るのだろう。

仕事をし遊び、生きることや死ぬことを考えるのだろう。

二日酔いをし風邪をひき、怪我をしたり皮膚が痒くなるのかもしれない。

でも、それはほとんど『生きているということ』と同じ意味だ。

ただ、僕は誰かではなくボクなのだ。

だから僕は去年と変わらず、今年もボクで在ろうと思う。出来るならばメズラシイ感じで…

変わることも変わらないこともとりあえずアリにして、死なず、殺さず、生きようと思う。

あけましておめでとうございます

徳永 雅樹

お酒大好きな皆さん、あけましておめでとうございます。

昨年も競馬や出張を理由に「はらぐち」さんへ幾度も足を運び、店主、常連客の皆さんにはとても可愛がっていただきここに感謝いたします。

我が大分からも同志が足を運ぶようになり大変嬉しく思います。

先日、大分市内の某店で行われた「久保田の会」に参加した際、新潟から来ていた蔵元の営業さんが北九州の「はらぐち」の名前を口にしていたのには驚きました。あちらも、私が大分から北九州まで呑みに行くことに驚いていました。

また、先日、別府市内にオープンした小さな日本酒のバーの若いママさん、話しているうちに御手洗酒店の常連客の娘と同級生とか。それ以降こっそり通うようになりました。まあこれ以外にも酒が縁で新たな出会いがたくさんありました。同じ呑むなら家より外で！

改めてそう感じた巳年の一年でした。

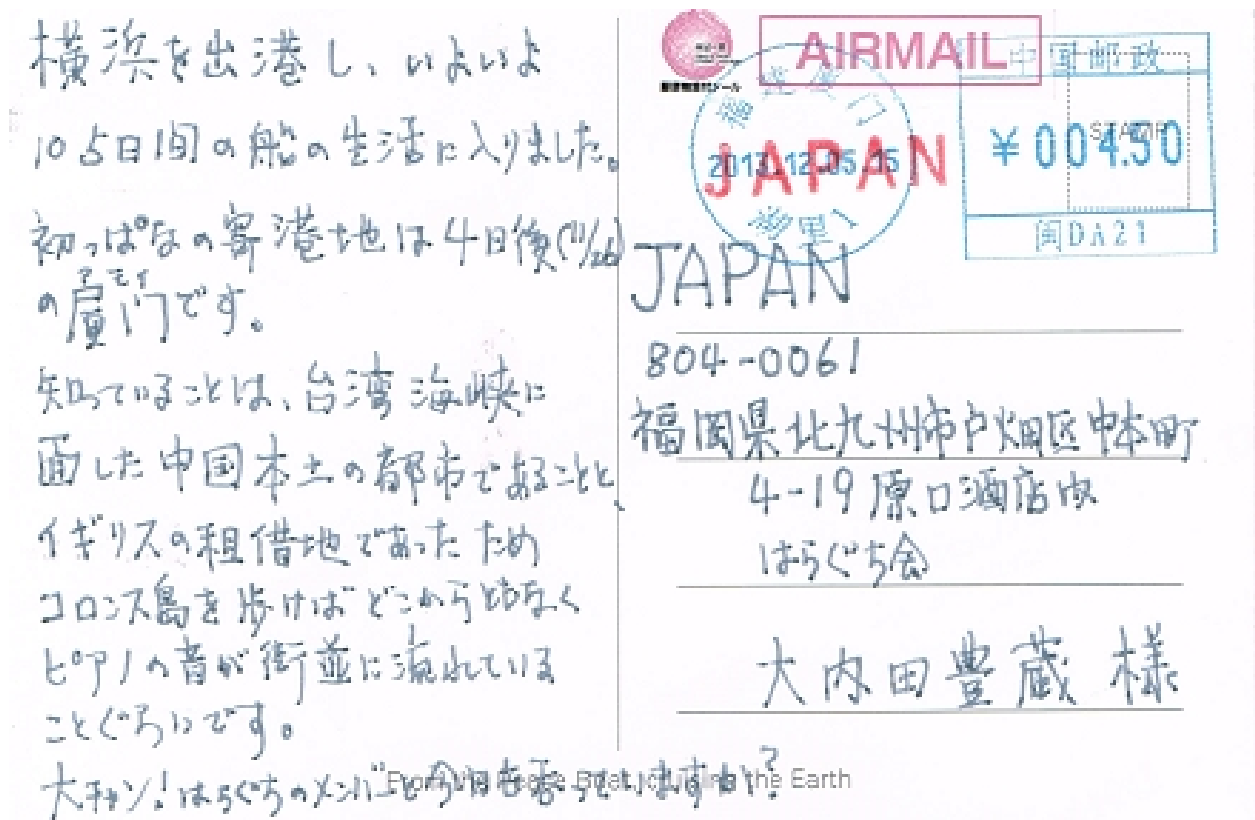
さて、今年は「午年」。ちょっと難しい漢字ですが私には「馬年」でいい。早速二月から小倉競馬が始まります。気持ちはサラブレッドの如く駆け抜けたいが身体は駄馬そのもの。

酒も競馬も楽しめればそれでよし。

今年も一年よろしくおねがいます。

ピースボート オーシャンドリーム号からのたよりその1

大内田はらぐち会会長の友人が二回目の世界一周の船旅に出ました。これから、数回に亘り紹介します。皆さんも船旅を楽しんでください。



ピースボート オーシャンドリーム号からのたよりその2



奉仕活動

酒夢人（諸岡昭男）

最近では地域の奉仕活動や同窓会の公務が多い。

町内会長と大学同窓会支部長やいろいろなと真面目（以前より）な活動をしている。町内会長は逃げて逃げていたが、ついに捕まった。4月よりまあ～いろいろな仕事がある事に驚いている。祭り、神社清掃、夜間パトロール、市行事関係に商店街行事、定例会議、会費やその他集金、市政だより配布など今まで知らなかった事ばかりで新人としては長老達のご指示に従い動いている。おかげでご町内の方の名前と顔が一致してきた。

先日も「敬老会」があった。75歳以上が対象であり小生（69歳）が皆様のお世話をする。あと少しで私も参加する年齢になるが、楽しみだ。

また、別に65歳以上で独居生活者の慰労会が・・・年上の俺が世話をする事に多少の違和を感じるが独居者がこんなにおられるのかと改めて驚いた。やはり超高齢化社会（特に八幡東区）の現実を思い知らされた。自分も含めてどこまで地域に貢献出来るのか頑張ってるつもりだ。体力と相談しながら・・・

今年は北九州市が市制50周年で行事が多いが、外向けもいいがもっと市民や高齢者に予算を・・・これ以上は止めよう。

大学の同窓会（会員11万4千人）が来年50周年を迎える。全国支部長会議やら各地支部総会に顔出しやらなにやらかにやら雑用が多い。日帰りは良いのだが宿泊時は移動に費やす時間が、家族から二次、三次会を断れば良いのにと。それが出来れば良いのだが、仕事柄、夜の世界は卒業している小生としてはお化け屋敷みたいなクラブには行きたくないが先輩後輩達は絶対に行くのである。

若い頃は得意先の接待で料亭や鮎屋、倶楽部にそれこそ毎晩のように行った。女将やママさん、また仲居頭やチーママや料亭の下足番に色んな事を教わった。

バブルの頃から訳の分らん女性が増加して金を払って遊ぶでなく、金を払って遊ばせるのに今流行の「おもてなし」なんて言葉も知らない派遣女性ばかりの店の料金もだが、時間があほらしいのである。なんでもありの時代だが、若い頃に教わった事を還暦頃に多少理解出来るように、粹人とは・・・

最近思うには同窓会の楽しみは皆、二次会が目的では。先日も中州で現実を目撃した。某先輩の自宅は福岡市郊外だが、ホテルを予約していた。どうみてもタクシー代の方が安いのだが、いろいろあるのだろう 先輩の元気が一番だ。

女子だけの同窓会に参加（祝辞を）した事がある。日曜日、しかも雨降りに香椎でJR乗換えて志賀島のリゾートホテルに総会終了後懇親会の会場に入る。と、なんだか雰囲気。スイーツとフルーツだけしか目に入らん。アルコール類は全く無いような予感が。約1.5時間の懇親会はコーヒーと紅茶のパーティーだった。二十数名に幼児達が加わり会話が盛り上がる。まあ～嬌声が飛び交いそれは姦しいなんてもんじゃない、まさに苦行である。経験者の方は理解出来ると思います。男は二人のみ、しかも酒は飲めない方であり当方はただ静かにほほ笑み佇むのみ、辛い時間だった。今年は因みに手芸教室だった。辛い。

話は変わりますが、また最近色んな会にお誘いの案内が届く事がよくある。タキシード着用からただの飲み会までまさにピンキリである。酒（清酒・ワイン・ウイスキー・ラム・焼酎・料理他）を楽しむ会が多いが、酒販売を生業（なりわり）にされている方が主催であれば安心出来るし知人にもお誘い出来るがいろいろな方が各地で開催している。

清酒やワインなど造り手は年1回しか造れないのである。杜氏さんが蔵に出入りして仮に40年、しかし0から10までを全部造る事は何回経験があるだろうか。ワインも同様である。料理や物作りの達人は多いが仮に失敗しても直ぐに取り掛かれるが、酒、ワインは翌年まで待つしかない。設備投資すれば別ですが。

若い方によく聞かれます。どの酒が旨いですか。あの銘柄はどうですか。また、諸岡さんの一押し蔵はどこですか。彼等には、お酒はどの蔵の酒も旨いですよ。でも今日はこの銘柄が自分に合うよ。貴方（貴女）に合う酒が一番良い酒ですよ。酒は嗜好品であり個人の好みもある。自分の体調に合わせて楽しむ事と。

特に銘柄についてコメントがあまりにも、どこまで酒が分っているのかなあ〜。

そんなこんなでご無礼する事が多々ある。割烹や小料理屋のご主人は自分の料理（味付け）に合う酒はご存じだろうし、店で売る酒と好きな酒は別と認識している筈だ。関西の有名鮎割烹は1年経過した酒しか提供しない。勿論品質管理は絶対であるが、客はこの事は全く知らないのである。

先輩諸兄にお叱り受けそうな事を羅列しましたがボケ白髪に免じて。

川柳もどき・・・笑読下さい。

「年はじめ おなご四代 姦しや」

「今年こそ 酒と煙草を また夢か」

今年も皆様に佳い（酔い）年になりますように。

呑みたい場所

諦念

あけましておめでとうございます。
今年もお付き合い宜しくお願ひします。

毎年、年末から年始にかけての酒量が確実に減ってきている。何故だろうか、年のせいではない、座って呑むからではないだろうか。立って呑む習慣の恐ろしさを実感している。

・立待や酒の流れは一直線

角打ちの拠点は、本拠地のはらぐち酒店を別格として、若松の野村酒店、ここは、龍さんの本拠地であるが吉本先生と若戸渡船の回数券を買ってまで通っている。去年は、林酒

造場の蔵開き前の蔵訪問、高塔山のあじさい祭り、若戸大橋ウォーキング大会、「金鍋」での忘年会と恩恵を受けた。地味な角打ちであるが懐は深い。

それと、黒崎のいのくち酒店。ここは、はらぐちの帰りに寄ることもあるが、用事で黒崎に出た時は目標を5時としている。店のぬしのSさんが、最初の一杯を奢ってくれる居心地のいい角打ちである。

角打ちで知り合った友達は、本当に頼もしくありがたい存在になった。呑みたい場所がある、呑みたい場所を持っているということは幸せである。

また、大分の御手洗酒店と神戸角打ち学会との交流もある。

「ありがたい」

・角打ちの癖さまざまや七変化

うちに知らせんといてくれ

鯨飲 酔公

年末年始の忘年会・新年会のシーズンでは皆様もお酒を楽しまれたかと思いますが、横紙破りの剛の者が多い映画人の場合、まあ何と申しますか酒席でのトンデモない話が多くて……。

1960年代の東映、特に京都撮影所の監督は酒豪揃いで、東映任侠映画の最高峰「博打ち・総長賭博」の山下耕作、数年前にもリメイクされた集団時代劇の秀作「十三人の刺客」の工藤栄一、後年には東京撮影所からひとり乗り込んで「仁義なき戦い」で大ブレイクする深作欣二といった面々が、その日の撮影を終えて撮影所近くの飲み屋に繰り出してバカ話や会社の悪口三昧。それだけならはらぐち会と大して変わりありませんが(失礼!)度を越すとどのような事になるかという……。

山下監督、工藤監督、撮影監督の古谷伸、若手助監督の深尾道典といった面々がある仲間の昇任祝いパーティーの三次会に残った。店は先斗町の小料理屋「ますだ」。産経新聞記者時代の司馬遼太郎氏が足しげく通い、内田吐夢監督や俳優の金子信雄といった関西系の文化人も常連のこの店で深尾氏がやらかして(内容については割愛。不快極まる狼藉とだけ書いておきます)、残りの三人が激怒、「表に出ろ!」と連れ出して制裁を加えたのですが店には運悪く新聞記者が。彼の通報を受けたお巡りさんによって三人は留置場へ宿泊の憂き目に。山下、工藤ご両人は自分の映画製作の真っ最中で、山下作品のタイトルは「大喧嘩(おおでいり)」、工藤作品は「大殺陣(だいさつじん)」。翌朝の新聞には「映画を地で行く暴力監督」と書かれる始末。「喧嘩」と「殺陣」の監督のブラックジョークと今では笑える話ですが、監督がこれでは撮影に支障が出るため撮影所長が警察署長と話をつけて、撮影所員がもらい下げに行ったところ、三人とも反省のそぶりは全くみせず、堂々と留置場のど真ん中に鎮座。特に工藤監督は一晩のうちに何かあったらしく、相部屋になった窃盗犯やヤクザから「先生」と呼ばれ、もはや牢名主の状態。工藤監督すごいなあ(笑)。

そのときに撮影所員が警官に言われたエピソードが面白い。

警官：映画人って変な人が多いですね。

所員：なんで？

警官：「うちには知らせんといってくれ。会社にだけ知らせてくれって言うんです。
普通は逆ですよ」

彼らにとって、撮影所の方が家庭よりも安らげる場所だったのでしょうが、それでも普通の会社ならクビは無いでしょうけど謹慎ぐらいは喰らいますよねえ。

「川上音二郎貞奴物語 2013」

響 金太郎

もういまさら感満載ですが・・・

出演者としてはもしかしたら最後かもしれないが・・・

博多座「川上音二郎貞奴物語 2013」無事終了しましたー！！！！

もう10日、まだ10日、ただ10日。

でも「全ては主観性を失って歴史的遠近法の彼方で古典になっていく」んでしょうね。

終演後、体調を崩したこともあり（おかげで糸島の上映会に行けなかった号泣）、まだなーんも振り返れません。。。

なので、これから3ヶ月くらいかけて、「おめー、まだそれかよ」って言われるくらい、スルメしゃぶるが如く振り返りたいと思います。

御来場のお客様、共演いただいた方々、スタッフの皆さま、ありがとうございました！！！！

博多座に入ったこともなかった自分にとっては、いきなり向こうから博多座がものすごい勢いでやってきて、博多座に巻き込まれて必死にもがいたけど、結局何もできないまま博多座は去っていきました。

だから、またこの楽屋に戻ってやろうと思うのです。



囲碁とお酒

上田 喜久雄

② 素人は楽しみ、玄人はくるしむ

新年明けましておめでとうございます。今年は年男、一年間元気で過ごしたいと思っています。元気のバロメーターはとりもなおさず、お酒が美味しく飲めるかどうか。みなさんのご指導、ご鞭撻を心よりお願い申し上げます。

昨年6月に「老松囲碁クラブ」に、加えていただいて早いもので半年が過ぎました。その間、「老松いこいの家囲碁同好会」との交流試合が二回打たれ、合同忘年会も実現しました。この展開は、私の考えてたいた通りのもので、とても嬉しく思っています。この分では花見の宴も実現しそうです。

最近読んだ本に影山利郎著の「素人（アマ）と玄人（プロ）」（2013年9月日本棋院発行）がありますが、この中で、氏は『囲碁に愛情を感じ、どんなに強くなっても、もう半子、もう一子強くなりたいと願うことは、素人も玄人も変わりはない。所詮これは、生きるかぎり続けられる人間の“欲”であり“張り”であろう。素人はたのしみ、玄人はくるしむ。要略すればこの一語に尽きる素人と玄人の差である』と述べています。

現在、クラブでの段級位は三段ですが、影山氏のことばを噛み締めながら囲碁とお酒を一年間楽しみたいと思っています。

金婚式

喜六郎

11月に姉の子の息子の結婚式に列席した。座席表には、大叔父・大叔母と書かれていた。

新郎は少し見ないうちにたくましい青年になっており、新婦もゆるぎない社会人であった。

華やかな結婚式は、二人にとって本当にふさわしいように思えた。その式場に居て、私たちも12月で50年になることに気付いた。

市民会館のロビーを借り、柱から柱に紅白の幕を張り350円の会費でスルメと焼酎だけであった。すべて職場の青年部が主催してくれた。

祝い金を持って、その晩の夜行で宮崎に出発した。帰ってきた日が給料日でその後の生活に当てた。

思えば50年よく生きられたものだと思う。すでに父の齢を越えている。

しかもツレも一応健在で、別れもしないで生きてきた。考えてみれば、短気で怒りっぽいオレに50年も付き合ってくれたツレはがまん強い。もしかしたらオレのことが好きなのか。そういうことを考えながら、新しい門出を祝福した。

そして思った。結婚を祝福するのは、その後の、30年、50年のながい幸せの祈りの儀式かもしれない。であれば、金婚式は結婚式よりも、もっと盛大に華やかに行ってもいいのでは。

今年は金婚式のイベントを立ち上げようかとそれなりの人たちと、お湯割りの焼酎を飲みながらその思いに酔いしれている。

十六夜や満州生まれの妻と居て

若松のむてっぽう松（2）

瓦口 龍

彼は内股の中距離ランナーだった。

あの年の花見が終わる迄は。

その年の花見は例年になく盛り上がった。参加者はいつものメンバー20人、老若男女、バランスよし。場所は、若松の桜の名所のひとつ、佐藤公園。高塔山の正面登り口にある。桜の木は少ないが、東屋と中央を流れる疏水を取り囲むように、満開の桜が時折の風に舞っている、という絶好のロケーションだ。天候にも恵まれ、用意した酒が底をつき近くの店に二度走る程だった。

彼は、彼の為に用意されたキリンラガーを黙々と飲み干す。花見弁当の塩鯖をつつきながら。彼が二度目に立ち上がった時、少しフラついたのでを皆知っていた。

周囲の花見客はいつの間にか居なくなり、我がメンバーが腰を上げたのは4時過ぎだった。片付けも終り、それぞれが公園出口に集まり始めた時だった。皆わが目を疑った。

一瞬の間隙をついて、彼が自転車に乗っていた。高塔山登り口にある佐藤公園の前も登り坂になっている。

腰をあげてこぎ進む彼の行方は不幸なことに下り坂だった。誰もが惨事を思った。

控え目に笑みを浮かべた彼は裏切ることなく皆の目の前で左端の電柱に突っ込んで行った。派手な音を聞いて近所の人も駆けつける。ティッシュの箱、トイレットペーパーを持つ手練もいる。

シャイな彼は無言のまま目から飛び出た星を捜すかのように春の空をながめていた。顔面の出血も知らぬげに。救急車とパトカーが到着した。説明を求める警察官に広報担当の女性が説明する。酒はあまり飲んでいない。自転車は押して走っていたと。理不尽を補って余りある真剣な目に二人の警察官は引き際をわきまえていた。

彼の掛け付けの病院に救急車はむかう。彼の自転車を片付けるもの、病院に行くもの、近所の人達にお礼を述べるもの、彼との交際では想定内のことと粛々と進む。

病院で手当てを終えたのち、彼は飲み直そうと主張したが、黒霧さんの登場によりそのまま入院することとなった。

翌夕方、いつもの酒屋、いつもの場所に彼はいた。さすがに椅子に腰を下していた。真

新しい松葉杖はさりげなく片隅に置かれていた。

端正な顔は包帯をぐるぐると巻かれていた。

一か月後に松葉杖も要らなくなった。

夏が終わった頃、左足を固めていた石膏が外された。しかしその後、彼は走ることをやめた。内股の中距離ランナーだった。花見後、彼の左足は外股になっていた。

彼はこの所、少し飲み過ぎだ。

彼が元気な内はまだまだ無鉄砲伝をお届け出来る。

五・七・五に思いをこめて

更井 にご

新年おめでとうございます。

今年も宜しく願います。

俳句をはじめて二十二年が過ぎました。こんなに長く続いているのが自分でも不思議に思えます。今では俳句は生活の一部をなしていますから、これから先もずっと、大袈裟に言えば死ぬまで俳句大好きのままにいられると確信しています。

今回、「はら閑」に母の句を、と思い調べてみましたら三十数句ありました。二十二年間にしては少ないなあと驚いています。

母と来て都府楼の野に若菜摘む	H 5 年
秋暑し母寝返りを打つらしき	H 6 年
露の臺重しに母の走り書き	H 7 年
無花果の十字ほどけり母訪はな	H 8 年
卒寿なる母ありて祝ぐ敬老日	H 8 年
逃げ水や母を送りて角いくつ	H 9 年
種芋が引っ越す母の荷のひとつ	H 10 年
母の衣をパッチワークに冬ぬくし	H 11 年
季寄繰る母すこやかに年暮るる	H 12 年
今年また母ある方を恵方とす	H 13 年
身に入むや罨をはみ出す母の稿	H 14 年
流星や母のしているものを見る	H 15 年
二百十日二十日事なく過ぎて母	H 16 年
小春日や母の笑顔の佛めく	H 17 年
吐く息に合はす点滴春の潮	H 19 年
室花で埋まる柩に師の一句	H 20 年
下萌や柩に杖を入れ忘る	H 20 年

花種子や茶の封筒に母の文字	H21年
野苺や羅漢にさがす母の面	H21年
春中や母の声して一人なり	H22年
身に入むやついて短し母の杖	H23年

こうしてならべて見ると、俳句の良し悪しと関係なく、母とのかかわりがなつかしく胸にせまってきます。

もし俳句をしてなかったら、思い出も色あせたセピア色の写真だけだったでしょう。でも私は俳句のおかげで母の思い出を言葉でのこすことができました。

みなさんも俳句はじめてみませんか。

(ちなみに、母は90歳からひとりではじめました。102歳まで続けました。)

酒飲み、こだわり (6)

番外編

吉本 光一

一年の経つのが年毎に早くなりますね——同年輩の友人と交わす挨拶の決まり文句だ。医学者に聞くと「神経伝達速度が加齢とともに遅くなり、それに反比例して時間を短く感じる」のだとか。また心理学者は「驚きや心のときめきが減るためだ」という。理屈はどうであれ、この1年間に歩んだ道程は過去78年間に踏破した全長の78分の1でしかないことははっきりしている。それなら、と78歳の誕生日に子どもが送ってくれた旨い冷酒を飲みながら考えた。「3度目の26歳の誕生日であれば、新しい1年は全長の26分の1になるではないか」。26歳への若返り、つまりは、四十、五十は漬垂れ小僧などと憎まれ口をたたかず、初めて社会に踏み出したころの初心に戻る、ということだ。こうして迎えたあらたまの年の節目。予定を変えて、番外編、酒飲み人生のラストラウンドに展開する新たなこだわりの中間報告に——。

子どもの目

大晦日の午後3時。東京はJR蒲田駅前のバス停で羽田空港行きのバスを待つ行列に並んでいると、背後で子どもの声が出た。「あのひと、並んでないよお」。振り返ると、3歳くらいの男の子が、右手を精一杯伸ばして私の顔を指さし、母親に懸命に訴えている。キラリとした眼差しは真剣そのものだ。その目の奥に、数年前まで勤めていた北陸の大学のバス停の光景が重なって見えた。

県都郊外の田地の一角に新設された県立大学の裏に養護学校があり、小学生くらいの年齢の生徒がよく先生と一緒にバスを待っていた。バスが順調に來れば普通の小学生と区別がつかないが、到着が遅れると大声をあげて騒ぎだす子がいた。「バスが來ないよお。どうしょう!」。まるで飛行機に乗り遅れるといった真剣さだ。時刻表と腕時計を見比べて

は同じ言葉を繰り返し、そこらを走り回る。「約束事が約束通りに運ばないと強い不安に襲われる。物事への強いこだわりを示すのが、自閉症に特徴的な症状です」と、あるとき心理学の教授が教えてくれた。

相手が幼な子だろうと、目をすえて「後ろ指」指されたら気持ちのいいものではない。キャリーバッグを行列の中に置き、脇にはみ出した形で並んでいた私はギョツとした。そんな素振りが見えたのか、母親が膝を折ってなだめはじめた。「だれにも都合があるの。決められた通りにならないことだってあるのよ」。

ギョツとしたのは、「後ろ指」指されたこともあるが、自閉症児の姿と重なって見えたためでもあった。しかし、冷静に考えれば、決められた約束事をしっかり守ることは、この年頃の児の発達段階ではだれもが身に付けなければならない課題のひとつだ。いったんそれが達成された後、いろんな経験を積み重ねる中でやがてその原則が緩和されてゆく。一つ一つの発達段階を疎かにするのは、反社会的な大人を育てるのに等しい。

笑顔を繕ってその子に軽くうなづき行列の中に入るとバスが到着した。座席に座ってホッとしていると、目の前にあの子の姿が。さっきの後ろ指の指先に10円玉を1個摘んで差し出し、酷しかった目がニコッと笑っている。空港まで270円の運賃に1000円札を機械に入れ、釣り銭をさらってきたつもりだったが、指先がかじかみ1個残してきたらしい。言葉はないが、「気持ちが通じてよかった」と言っているように見えた。

子どもの目を人類の将来が託された大切なものと真摯に受けとめ、自らの作品に映し出すのに成功した絵本画家がいる。1930年英国に生まれ、長らく世界最長老の絵本画家として描き続けたブライアン・ワイルドスミスがその人だ。その作品に私が初めて出会ったのは、8年前、赴任していた北陸の町での展覧会だった。

生き物の動きのある姿を、あたかも岩合光昭の写真のように瞬間で捉えて描き出す観察力、デッサン力、そして想像力豊かに駆使した色彩に驚き、魅了された。繊細、緻密な筆運びはまるで象嵌工芸のようだし、人物、動物、鳥などの生き物、なかでも「ウサギとカメラ」、「ライオンとネズミ」などの作品に描かれた動物たちは、「何を考えているの？」と問いかけたくなるほど、いきいきと魅力にあふれている。

この魅力の源はいったい何なのか。会場を一巡して思い当たったのは、同画伯が子どもに接する真摯な姿勢だった。上からの目線でなく、水平の目線が全作品を貫いている。子どもに何かを教えようとするのでなく、遊びの世界を子どもと一緒に広げる、そのための手助けをする、というスタンスに打たれた。人が病気や怪我になったときこれを救うのは医療の場であり、そこでは医療サービスの質の良し悪しが健康状態や寿命を左右する。それと同様に遊びの場でも「手助け」の質の良し悪しが遊びの世界の広がりや左右する。だから手抜きは禁物で、小さな点の一つ一つにまで心をこめて丹念に描くのだ。

「子らにとって、一生涯、変わることはない幸福の源泉——それは創造の力です」と同画伯は書き残している。子どもの創造力の源泉といえば遊びの世界にほかならない。その作品は、遊びの世界、遊びの心を子らと共有する価値を大人に伝えるものでもある。

日本人の歴史の中で、酒は文化を支え育てる上で大きな役割を果たしてきた。酒と子どもの目とは無縁なもののように見えるが、「創造力」という糸で結ばれている。酒の縁で結ばれた人の輪が、子らに直に働きかける場（祭りのような）ができないものか。

正月の酒

日本酒と洋酒の決定的な差異はといえば、日本酒は上等な酒はもとより、安い酒もこれまた旨い、という点にある。口がいやしいからだ、とよく言われるが、不味い酒というのがない。とりわけ正月の酒はまた格別の味がする。

8月に母が、加えて年末に妹の亭主が他界して服喪中の今年は、一人ひっそりと正月を過ごすことに決め、暮に正月用の酒を仕込んだ。家には子どもらが送ってくれた北陸、東北の純米吟醸酒が3本ほどあったが、はらぐちの角打ち店の仕事納めの日、欲を出してもう1本持ち帰った。ちいママが選んでくれたのは八海山の純米吟醸生原酒17.5度。

妹の家は横浜市にある。人口に比べて火葬場が少ないこの市では、火葬場の空きを捜し出すのが大仕事で、1週間から10日も間があくことが珍しくない。今回も1週間目の大晦日にずれ込んだ。野辺の送りをすませて羽田空港にたどり着いたのは午後3時半。まずはスターフライヤーの窓口へ。最終便まで満席だ。200mほど離れたJALへ。3時間先の福岡行きにもぐり込むことができたが、若松の家にとどり着いたのは除夜の鐘が鳴る寸前だった。

翌朝、注文しておいたおせち料理を取りに店へ。本来、受け取り日は31日限りだったのを、出発前に事情を話して元日に延ばしてもらった。レジへ行くと、「いま、中央で福引きをしています。5回引けますよ」。元日の福引きは初めてだが、もともとくじ運が悪く当たった経験がないので期待も起きない。抽選機のハンドルを無心に回す。と、白、赤、グレーと3色の玉が転がり出た。「や、大当たり、自転車ですよ」。えっ、たった1台の自転車が！ 間違いじゃないの？ 壁の4等賞のマークと同じ色だって。チェーンが剥き出しでなく、ケースに納まって、後輪の上に荷台も付いている。私が乗ってきたのよりずっと高級だ。

「乗って帰って下さいね」と言われて重箱の包みをかごに入れて乗ってみた。24インチとやや小ぶりのママチャリは、残念ながら私の体には合わない。折角の大当たりも宝の持ち腐れではないか。福の神も意地が悪い。

めでたさも中ぐらい、といってしまうえば身も蓋もない。その心はとを巡らすと、有頂天になってはいかんという声が耳の底に伝わってきた。ひるがえってこちら3年間続いたはらぐち閑話。かすとりで終わることなく18号まで続いたのは、毎号の書き手のひたむきな心と、割り付け、印刷まで一手に引き受けてくれる編集デスクの献身的な努力のお蔭だ。下手は下手なりにいまの思いを書き残し、編集者はその創造の心を何より大切にしてきた。その蓄積が筆を磨き、心を磨いてくれる。3年続いたと有頂天になり心を曇らせたなら、これまでの努力が水の泡と消えてしまう。そうか、元日の朝に、初心に返れという天の啓示か。福の神は乙なことをしてくれる。「越後で候」印の生原酒もおせち料理も、今年は最高の出来だった。

もうひとつ、毎年正月明けに高校時代の友人と飲む美味しい酒がある。東京・紀尾井町の料理店は、福井の「黒龍」が1合5000円の店だが、メンバーに顔の利く男がいて、特別価格でサービスしてくれる。飲み放題の特別価格だから、お銚子はアルコール添加の「普通酒」なのだが、寄ってくる顔ぶれが酒の味を変えてしまう。最初の出会い（入学）から今年で60年。この新年会も20年ほどになる。

この常連が中核となって、雑文集を約1年半に1度のペースで出している。もとは60年前にガリ判刷りでつくり、卒業とともに自然消滅していたが、10年ほど前に復刊した。新年会の安酒を旨酒に変えるのは、この文集の底に流れる旺盛な創造力だ。

あるとき、東京の出版社幻冬舎から宅急便が届いた。菅直人が原発の本を出した直後だったのでそれかと思ったら、常連の1人、銀行マンOBの本だった。ニクソン、フォード、レーガンという歴代米大統領のブレインを務めたアメリカの政治評論家パトリック・J. ブキャナンが *Suicide of a Superpower* という標題の本を2011年に出した。その翻訳書で、日本語のタイトルは「超大国の自殺ーアメリカは2025年まで生き延びるか?」。580余ページの大作である。

感銘を受けたのは、末尾の40ページにのぼる膨大な文献リストだ。日本のいわゆる評論家の著作で、自分の見解と引用の境が曖昧なことが常々気になっていた。この引用文献のリストは、それ自体が文献としての価値を持っている。だが、「超大国の自殺」というタイトルの日本語は頂けない。彼に返信を送った。

……原著にも *Suicide* の語が使われていますが、私は、「自殺」とは、E.H.Erikson のいう年齢階級に応じた発達課題の克服、アイデンティティを達成できないときの帰結と理解しています。古代中国では天災はときの為政者・政治に対する天の怒りだと考えられていたそうですが、現代の米国では、天災を味方につける才覚が為政者の要件であり利点でもあるようです。為政者にはアイデンティティが認められるが、国には発達課題もアイデンティティも実在しない。従って、国が自殺するというのは、違和感を覚えます……

彼から丁重な礼状がきた。

酒と創造力をわが国で結び付けたのは、たぶん万葉集の筑紫歌壇の歌人たちだったと思う。筑紫歌壇ほどの高望みはしないが、はらぐち閑話も安酒をうま酒に変える場になると信じている。

編集後記

☆昨秋県医師会の医療モニター会議で、肺炎が脳卒中を抜いて国民死因の第三位に浮上したことが深刻な話題となった。脳卒中が根治せず、慢性期に施設介護のなかで起きる誤嚥、肺炎が増えたのだ。三十年前に「医療による延命は天命に反するか」を議論したが、いまは「終末期先送り」の忌避は天命に反するか、を問いたい。

☆退職後の大学で教えた卒業生から写真付きのメールが。「今朝、分娩室へ入って三十分でポッコと出てきてくれました」。

私の市民講座を聴いて社会福祉の道を選び国家資格を二つ取ったが、朝日新聞の記者と結婚し暫く仕事を離れたたいというのを「鉄は熱いうちに打て」と翻意させた。それから五年。成長した医療ソーシャルワーカーに可愛い女の子。母親同様、賢くチャーミングな人材に育つことだろう。(ぼんぼん仙)

☆今年も、大内田会長の念頭挨拶のとおり、はらぐち会の活性化に皆さんと協力して行きたい思います。当面の行事は、3月29日の「鍋島蔵開き」を貸切バスで計画します。

☆午年の兜町の格言は「尻下がりに」、午年から連想される会社は、天馬、ペガサスミシン製造、駒井ハルテック、群馬銀行、東京都競馬とのこと。安倍さんの力がどこまで・・・

「まあ、ゆっくり世間話をしていきませんか。お茶でなくお酒を呑みながら」。

投稿をお待ちします。題材、文の長短を問いません。「酒」に縁のある内容であればということなしです。投稿は、はらぐち酒店に預けていただくか、kei2@bronze.ocn.ne.jpへ宜しく願います。

「はらぐち閑話」は、はらぐち酒店HP (<http://homepagel.nifty.com/haraguchi/sake/>)もしくは、戸畑はらぐち酒店で検索してくださいの「かくうちの部屋」でご覧いただけます。

次回発行は3月11日(2月28日締切り)とします。(今朝の鮭)

はらぐち酒店：北九州市戸畑区中本町4番19号

電話093-871-2150

sake-tobata@nifty.com